

闘うことは生きること

——ネパール・ドゥルガ・ソブさんとの交流から

斧田 薫(部落解放同盟伊丹支部/サマンタ(反差別草の根交流の会))

山本 愛(サマンタ(反差別草の根交流の会))

IMADRからの呼びかけをうけ、2005年からFEDO(フェミニスト・ダリット協会)と交流を重ねていた部落解放同盟伊丹支部(以下伊丹支部)とサマンタ(反差別草の根交流の会)のメンバーが中心となり、9月17日(土)にドゥルガ・ソブさんとの交流を企画した。以下当日の報告と、ネパールとの交流を振り返って思うことを記したい。

報告①: 部落解放同盟伊丹支部女性部との交流(報告:山本愛)

日本の部落女性と対話したいというドゥルガさんの強い希望により、17日の午前中は部落解放同盟伊丹支部で女性部との時間を持ち、13人が集った。伊丹支部書記長の池田千津美さんから、伊丹での解放運動の始まりについての説明がなされた後に、支部の女性たちが自身の子育てについて語った。田中章子さんは、自分は部落出身だと知られずに育ってきたこと、高校生の頃に友人から自分が部落出身であることを告げられてショックを受け、親を恨んだ時期もあったこと、しかし部落問題を学習していた友人と交流が始まったことで部落問題に対する正しい認識を得ることができ、自分の子どもには小さいころから社会的立場を自覚させ、たくましく育ててほしいと願いながら子育てをしてきたことなどを語った。ドゥルガさんは、小学生の自分の子どもは自分がダリットであることは認識しているが、「私も大きくなったらお母さんのように大勢の前で演説をするような偉い人になりたい」と言われた、とダリット

問題を伝えることの難しさを話された。

また、伊丹支部は女性が前面に出て、活発に解放運動に関わっている数少ない支部であることを知ったドゥルガさんは、女性たちの運動への動機を尋ねた。家父長制がまだ根強く残るネパール、特に保守的な村落において女性を組織化し、意識化させることはまだ難しいため、活動のヒントになればということだった。支部の女性たちからは、運動のきっかけは子どもの教育問題から出発していたこと、しかし実際の部落解放運動は男性優位であり、伊丹の女性も「生活の苦勞をすべてかぶった上で運動にもかかわっている」人が多いので、よく動いているように見えるが、必ずしも女性の力が強いかというとそうではないということだった。「日常生活にあふれる差別問題に気づき、そこから変革にどう結びつけるのか。このことと日常的に向き合うことが解放運動だ」という池田書記長の言葉にドゥルガさんはうなずき、ダリット解放運動・部落解放運動両方においてジェンダーは課題であり、共に力をあわせて取り組んでいかねばならないということが話し合われた。

(写真提供: 部落解放同盟伊丹支部)



報告②: 講演会「闘うことは生きること〜カースト制から解放される日まで」(報告:山本愛)

同日午後は、伊丹市立人権啓発センター『ふらっと』でネパールのダリット差別とFEDOの活動を伝える表題の報告会を実施し、一般市民、学校・行政・団体関係者含めて68人が参加した。インドとは若干異なるネパールのカースト制度の仕組み、厳しい差別の実態、FEDOの取り組みについて40分間報告があった後、フロアとの活発な質疑応答が行われた。中でも印象的だったのが、ドゥルガさん自身の生い立ちについての語りである。一部をここに紹介したい。

「私はネパールの極西部の丘陵地帯の出身

である。電気も電話もない、険しい山道しかない田舎で育ち、両親とも読み書きはできない人だった。『女はどうせ他家に嫁いでしまうもの、教育も不要』という時代。私は生後3日間、乳を与えられなかったと聞いている。しかし後に母は私が教育を受けることを望み、父や親戚の反対をおしきって、私を学校に入れてくれた。しかし学校生活は決して楽しいものではなかった。周囲にダリットの友人はおらず、先生も私を励ましてはくれなかった。ダリットは穢れているということで、いつも一人ぼっちで教室の後に敷いたムシロに座らされ、昼の軽食も他の子とは一緒に食べさせてもらえなくて辛かった。そのような時、母は私に『私たちはダリットだから仕方ないのだ』と言った。当時女の子は13歳頃になると結婚させられるご時世、私にも結婚話がきたが、私はそれを拒み続けた。その頃、私の後に続くダリットの子どもたちをつくらねばという強い思いに駆られ、毎朝学校が始まる前に、自宅にダリットの子どもたちを集めて読み書きを教え始めた。また、夜には近所のダリットの大人対象の識字教室も開いた。学校を卒業したあと首都のカトマンドゥウに出てきてからも、ダリットの、中でもダリット女性の権利について声を上げる人がまったくいない状況を知って、私が何かしなくてはと思いFEDOの設立に加わった…」。

ドゥルガさんの話の中には、現在もダリットの小学生（1年～5年）の9割が卒業前に中途退学してしまう状況であるという報告があったが、今から約30年も前に、彼女が地方で高校を卒業し、識字教室を始め、解放運動と共に歩む人生を主体的に選択できたことの意味は大きい。1994年のFEDO設立以来、代表を連続17年間つとめて国内外でのプレゼンスを高めているドゥルガさんであるが、その強さの背景にあるものをあらためて感じた時間であった。

さいごに:ネパールとの交流から(報告:斧田薫)

今回初めてFEDO代表のドゥルガさんを伊丹に迎えて交流することができたが、これまで6年間続けてきたネパールとの交流を振り返り、個人的に思うことを記したい。

2005年、伊丹支部においてFEDOのスタッフ2人との交流会を実施した。私はその時に初めてネパールのカースト制に基づく厳し



(ネパール訪問での交流
写真提供:サマンタ)

い差別社会の実態を知り、それがかつての日本の部落差別と酷似していることに驚いた。FEDOのスタッフからは日本の部落解放運動に学びたいと言われたが、逆に私は、ネパールで厳しい差別に立ち向かって命がけで闘う人たちに大変感動した。私はこれまで解放運動に取り組んできたが、運動を立ち上げた当事者ではない。今から約90年前に水平社が設立され、37年前には伊丹でも声を上げようと私の親世代の人たちが必死に闘い、築き上げられてきた解放運動の中で活動している、と感じているからだ。そんな私がFEDOの人たちに伝えられることなど何もなかった。むしろFEDOの人たちが語る、差別からの解放への願いを聞くことで、部落解放運動を立ち上げた当時の人たちの思いに触れたような感覚だった。

それからサマンタの活動を通じて2006年、2008年、2010年と3回ネパールを訪れてダリットと交流し、生活実態やさまざまな差別問題を知った。訪れる度に多くの課題・問題に直面し、私がネパールへ行くことで何が変わるのだろうかかと悩んだ時期があった。しかし、私はFEDOはじめさまざまな人びとの出会いや交流の中で、一方が他方を助ける、支えるという関係ではなく、互いが学びあう関係であることに気づかされていった。そして共に差別をなくしていきたいと思うようになり、ネパールで差別と闘う人たちとのつながりが確実に生まれ、その情報をキャッチするアンテナが張られた。そしてこれからも情報を得ながら、「動ける」時が来た時に動きたいと思っている。その原動力となる、「学び・関わり続ける」ということを大切にしていきたいと思っている。

(おのだから／やまもと あい)

※サマンタ(反差別草の根交流の会)について:2005年12月、IMADRと大阪のNGOが共同でネパールからFEDOのスタッフ2人を招へい。各地の部落女性との交流プログラムで出会った解放運動にかかわる人たちがつながり、継続してダリットと交流しながら学びあい「差別で苦しむ人のいない、すべての人びとが尊重され、自分らしく生きることができる社会」をめざして、伊丹支部のメンバーが中心となり2006年に設立。ネパールのマイノリティとの交流ツアーをはじめ、地域での啓発活動などを実施している。
<http://samantajapan.jimdo.com/>